

中國玉業務通訊

吉永小百合主演NHKドラマ「夢千代日記」

NHKは1981年2月15日～3月15日まで総合テレビ「ドラマ人間模様」で夢千代日記全5回を放送した。さらに1982年1月17日～2月14日まで総合テレビ「ドラマ人間模様」で続・夢千代日記全5回を放送した。

山陰のひなびた温泉街の芸者置き屋「はる屋」のおかみ・夢千代役に吉永小百合さん。吉永さんが36~37歳の時のドラマだ。吉永さんの演技のすばらしさが群を抜く。吉永さんはこの歳のころからすでに名優、大女優だったのだ。



初回放送から43年過ぎた。2024年11月20日～12月18日までNHK BSで夢千代日記が再放送された。2025年1月8日～2月5日までNHK BSで続・夢千代日記が再放送された。私は初回の放送を見逃したが、再放送の夢千代日記と続・夢千代日記を見た。

NHK NHKの夢千代日記第1回の紹介文だ。

『山陰のひなびた温泉町で芸者の置屋「はる家」を営む夢千代（吉永小百合）は、〈胎内被爆〉という宿命を背負っていた。夢千代のもとには、様々な過去を抱えた芸者たちが集まつてくる。夢千代はある日、神戸の病院から帰る急行列車の中で、殺人容疑で元芸者の市駒（片桐夕子）を追ってきたという神奈川県警の山根刑事（林隆三）と出会う。その後山根は、市駒の捜査のために夢千代が住む温泉町に姿を現し、町の人々に聞きこみを始めた。』

NHK iPの続・夢千代日記第1回の紹介文だ。

『夢千代（吉永小百合）は、神戸の病院から山陰の温泉町へ帰る列車の中で、ひとりの少女に出会う。一目で少女が家出をしてきたのだとわかった。20年前の夢千代にそっくりだったからである。夢千代は少女を自宅へ連れて帰るが、折しも金魚（秋吉久美子）がアコちゃんが行方不明だと大騒ぎをしていた。夜になって、アコちゃんはストリップ劇場に隠れているところを発見される。一方、家出してきた少女は好きな人を探しに来たと言う。』

ドラマの脚本は小説家、脚本家・早坂 晓（はやさか あきら、1929～2017）作だ。ストーリーは山陰地方の小さな温泉地の芸者置屋を舞台に追う者と追われる者とで展開する。夢千代日記の追う者は刑事・山根、追われる者は芸者・市駒。続・夢千代日記で追う者は家出少女・俊子、追われる者は俊子の小学校の先生・上村。場面展開が早く、推理小説のように新しい謎が次々と現れる。見る者を飽きさせない。追う者と追われる者は英國の作家・グレアム・グリーンが得意のストーリー（筋立て）、テーマだ。グレアム・グリーンが脚本を書いた映画「第三の男」（のちに小説が書かれた）は追う者と追われる者でストーリーが展開する。

NHKは40数年前にはこのような見ごたえのあるテレビドラマを作っていたのだ。吉永さん以外の配役もみな名優ばかり、さらにストーリーが面白い内容だ。俳優良し、ストーリー良し、だから間違いなく面白いはず。いまNHKが作るドラマは俳優の演技が下手で、ストーリーもつまらない内容ばかりだ。いまのNHK総合テレビ大河ドラマは主役が横浜流星なる男だと。私はこの男の素性、俳優キャリアについて全く知らない。NHKは視聴率の低い、つまらぬこの大河ドラマを力づくで見せようと毎日うんざりするほど番宣を流す。こんなえぐいことをしたら、ま

すます視聴者の反発、反感を買うのに。

NHK ご自慢の朝ドラのコンセプトは「世の中は善人ばかり、悪人はいない。みな仲良く。」だ。いまの朝ドラは漫画家・やなせたかしをモデルにした「あんばん」と。お涙と美談でやなせたかし姿を描き、戦争に反対し、憎んだやなせたかしの心は描かない。

このドラマのキーワードは「芸者」と「ストリップ小屋」だ。昭和時代まで日本各地の温泉街（地）にこの 2 つはつきものだった。この職業は日本社会の底辺に生きる女性の仕事だ。もう一人のさゆり。昭和時代を一条さゆりという名ストリッパーが生きた。こちらにも多くのサユリストがいた。

明治以降、欧米で日本のイメージは “Fujiyama” と “Geisha” だった。英国の辞書・オックスフォード英語辞書 (OED) の 1861 年版に “Geisha” という言葉が初めて載った。いま Fujiyama を見に海外から多くの観光客が日本に来る。

夢千代は母の胎内にいた時に広島で被爆し、白血病になり限られた命との設定だ。ということは、夢千代は 1945 年の生まれになる。吉永さんは 1945 年の生まれだ。早坂さんは主人公・夢千代は吉永さん以外にいない、吉永さんのためにとの思いでこのドラマを書いたのだろう。時代設定は当時の 1981 年、昭和 56 年。場所設定は兵庫県美方郡温泉町（現、新温泉町）の湯村温泉。そして昭和時代は 8 年後の 1989 年、昭和 63 年で終わった。

私は 1972 年に東レ株式会社に入社し、大阪本社に配属された。私は仕事外で様々な集まり、勉強会に出て社外の多くの人と付き合うようになった。その中で作家を目指していた女性と知り合った。喜尚晃子（きしょう あきこ）といった。ペンネームだ。私より年上で、少女のような純粋さと気品を備えた女性だった。結婚したが、別れたといっていた。私は彼女がそれまでどのような人生を送ってきたか知りたかったが、聞く勇気はなかった。また私は彼女に女を感じていなかった。

私は大阪市の靱公園近くの喜尚さんのマンションで開かれる集まりに参加していた。毎回数名が集まり文学談義に興じていた。木津川計さん（雑誌「上方芸能」編集長から大学教授）、守誠さん（ニチメンの商社マンから大学教授）、渡辺一雄さん（大丸デパート社員から作家。故人）などなども常連の参加者だった。若いころ仕事外で知り得た人々がいま私の貴重な財産となった。

喜尚さんの生まれ故郷が温泉町で、いつも温泉町の話をしていた。喜尚さんは自ら手稿文庫という出版社を経営し、同人雑誌「手稿」を発行していた。手稿文庫から短編小説集を何冊か出版していた。また「但馬・温泉町の民話と伝説」という本を出版している。

私は数年間大阪に住んだが、30歳前に海外駐在に出て大阪を離れた。海外に出たことでこの集まりも喜尚さんとの関係も途絶えた。海外勤務を終えてからは東京勤務となり、大阪に戻ることはなかった。大阪時代にこのドラマの舞台、そして喜尚さんの故郷でもある温泉町を一度も訪れることはなかった。短い大阪生活だったが、いまでも多くの思い出が残っている。

このドラマに登場する人物は貧しい人々、日本社会の底辺に生きる人々だ。金持ち、権力を持つ人は一人も登場しない。貧しくも、必死に生きる人々を描く。

80年に及ぶ自民党の治世が成し遂げたのは日本を差別社会と格差社会にしたことだ。敗戦後、自民政権が一貫して地方を見捨て、切り捨ててきたので、地方が過疎化し、疲弊したのは当然のことだ。東京だけの繁栄と地方の荒廃。しかし、歴史上、永遠に繁栄した国はない。バビロン帝国も、ローマ帝国も、ハプスブルグ帝国も滅んだ。「栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。」（新約聖書マタイ福音書 6 章 29 節） ソロモンの栄華も野の一輪の花に如かず。

いま湯村温泉はどうなっているのだろうか？ （横井幸夫 元東レ株式会社）



20代の吉永さん。吉永アン・サユリストが今も昔もどれ程いるだろうか。